巻頭特集

彦根市の地域移住への取り組み

観光地から「住みたいまち」へ

少子高齢化によって全国的な人口減少が進む中、
彦根市では歴史ある古民家を資源化し、
若い世代の移住定住を促進する取り組みを進めている。

人口減少対策に地域資源を活用

彦根市の人口推移をご存知だろうか。令和元年度の住民基本台帳によると、総人口は11万2928人。ここ100年のくくりでみると順調に右肩上がりを続け、直近10年は11万人以上を保ち続けている。しかしその内訳では高齢化が著しく、長い目でみると人口減少は避けられない課題と考えられている。

彦根市では、2016年に「彦根市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定。長期的な人口減少対策として、経済活動や観光・文化・芸術活動などを通じて同市を訪れ、継続的に関わりを持つ人口の増加を図っている。最終的な目標は、若い世代の移住を促し、地域活性化に結びつけることだ。

「彦根を、市外の人びとにとって『どこにいてもつながりがある場所』にしたい。内にいても外にいても関わりを持てる地域になれば、自然と人が集まってくる場所になると考えています」と話すのは、地域おこし協力隊員として彦根市企画振興部企画課に所属する小林由季さん。自身も埼玉県からの移住者で、現在は彦根市の移住コンシェルジュとして移住希望者にまちの案内や情報発信を行っている。

地域移住に欠かせない要素の一つに住居問題がある。彦根市は民間団体と提携して、市内の空き家を活用する仕組みを整えている。歴史ある古民家を地域資源と捉え、補助金などの支援策を付けて移住者に活用してもらいたい考えだ。

「空き家が少なくなれば地域の防犯対策になりますし、新しいものであふれかえる昨今、古き良きものに対する価値の再認識にもつながると期待しています」と小林さんは話す。

彦根市のみならず、近隣の市町でも移住促進担当部門が移住希望者への支援に取り組んでいる。各種情報提供や住居・就労先支援のほか、移住にいたるまでの支援プログラムを整備し、幅広い移住者のニーズに対応。ライフイベントを機にUターンやIターンを検討する人のほか、地方に起業の場を求めている人も少なくない。「そういった人びとにとって魅力あるまちに映るよう、しっかりとまちのPRや情報発信をしていきたい。彦根市には仕事も求人の数も十分あり、子育て環境も整いつつあります。観光地とは違う彦根市の魅力に目を向けてもらえるよう、アピールを続けていきます」と、小林さんはほほ笑む。

インフォメーション
彦根市企画振興部企画課
☎0749-30-6101（直通）

彦根で暮らそう！
～移住定住ガイド～
https://www.city.hikone.lg.jp/ijyu/

彦根市地域おこし協力隊
移住コンシェルジュ
小林由季さん

彦根市への移住をサポートしてくれる頼もしい存在。自身も埼玉県からの移住者。移住前に彦根市を訪れたときに出会った人から「移住を決めなくてもまた遊びに来てね」といわれ、「これで知り合いのいるまちになった」と安堵し、移住を決めた

移住者の声紹介❶

愛荘町　関 りんさん

2014年4月から愛荘町地域おこし協力隊として3年間活動。
その後も同町に残り、2017年6月に「ののすておりがみ屋」を、
2019年4月に「刺繍屋ポイトコセ」をオープン。

右）折り紙の多くが「色」で表現するところを、「ののすておりがみ」は模様で表現。さまざまな柄の動物が紙から生まれる

左）店内では「ののすておりがみ」を加工したピアスや髪留めのほか、刺繍製品も販売している

大学在学中に地域おこし協力隊に興味を持ち、「観光」「発信」を募集テーマにしている愛荘町を見つけて応募、移住しました。

このまちの魅力の一つに、近江上布やびんてまりなど、ものづくりの土壌があることがあります。私はその中から近江上布の型紙の模様に着目し、その模様をヨシ紙にプリントした「ののすておりがみ」を使ったワークショップや展示会を開催しながら、地域の人びとと交流してきました。せっかくなら他人ではなく家族のような関係を築きたいと思い、拠点である古民家を「おうち」と名付けて誰でも気軽に遊びに来られるような場所をめざしました。協力隊任期満了後もその名前を残しつつ、新たに折り紙と刺繍のお店として活動を続けています。

協力隊の立場で多様な人と出会え、それまで住んでいた土地では築けなかった人間関係を築けたことは、私にとって財産となりました。今はお店として商品やサービスを売ることに注力していますが、いずれ余裕ができたら、また「おうち」として地域のものづくりの共有の場にしていきたいです。

移住者の声紹介❷

彦根市　小林満さん

長野県出身。古民家暮らしに興味があり、地域移住体験を
繰り返したのちに鳥居本町に移住。有形文化財である建屋を活用して
十割手打そば処「百百百百（どどもも）」を開業中。

右）店名の「百百百百」には、「百々（どど）家住宅」という古民家の名称と、十割蕎麦の100％が掛かっている

左）有形文化財に指定されている古民家。補助金を活用しながら改修し、風情そのままにそば処をオープンした

『田舎暮らしの本（宝島社）』という雑誌が好きで、古民家に住むことを夢見つつ、十数年前から各地の空き家バンクに登録したり、仕事の長期休みを利用して移住体験をしていました。滋賀県の空き家バンクにも登録し、ツアーに参加しながら、琵琶湖や彦根城などの魅力に触れました。あるとき鳥居本町で好みの古民家を見つけ、購入。4年間の改修や整理のための期間を経て、昨年から移住してきました。

建物の1階では、古民家の雰囲気を生かして蕎麦店を開いています。店を手伝ってくれるパートさんは全員が鳥居本町の人です。パートさんたちも含め、この地域の人たちはとにかく親切。野菜をおすそ分けしてくれたり、自前の耕運機で畑づくりを手伝ってくれたり。縁もゆかりもない自分たちをあたたかく受け入れてくれて、本当に感謝しています。

古き良きまち並みが残る鳥居本町ですが、空き家が増えてきていると聞きます。移住者を呼び込むきっかけとなるべく、私も旧中山道鳥居本宿の魅力を発信する一員として取り組んでいきたいです。

移住者の声紹介❸

多賀町　谷涼香さん

大学で学んだ地域デザインを生かし、地域再生・ブランディングに
取り組むべく、2014年4月から多賀町水谷（すいだに）地区の
地域おこし協力隊として3年間活動した。

右）谷さんが手がけた「水谷通信」と3年間の活動を収めた写真集。後者は協力隊任期満了後に村の人に1冊ずつプレゼントした

左）多賀町の山奥にある水谷地区だが、「彦根駅まで車で10分ですし、山が近いので夏は涼しく快適」と谷さんは話す

大学で就職活動をしていた時期に、多賀町の山間部にある水谷地区の地域おこし協力隊の募集を見つけ、応募しました。水谷地区は、住民わずか30人ほど、それも高齢者が多数を占める、いわゆる限界集落。しかし山並みの風景や地域行事などの魅力ある場所なので、大学で学んだ地域デザインの知識を生かせると思い、移住を決めました。

お米づくりや赤しそ栽培、獣害対策の狩猟を体験する一方で、地域新聞「水谷通信」をつくり、水谷の皆さんにお配りしました。地域住民の皆さんの集まりを企画して開催する中で、高齢ゆえになかなか足を運べない方もいて、「家にいながら近所のことがわかるから助かるよ」といっていただけたことが印象に残っています。

協力隊の任期満了後も町内で別の仕事に就き、水谷地区に留まっています。集落の皆さんには相変わらず、娘や孫のように可愛がっていただいています。「山奥の村ならではの悩みは尽きないけど、生まれたところで暮らせるのがうれしい」という住民の皆さんの声を、私も大切にしていきたいです。

文・写真／中岡太郎　デザイン／chica